設

517
366

26. 9. 26

29774
左

千家九府
詩集

易首

夏草

千家元麿

大正
15. 9. 9
内交

517-366

詩集の序

自分の歌つた詩が少しでも讀者に益するところがあつたら自分は喜ぶ。自分の内に燃える火がかゝした之等の詩は他人にとつても亦無關心のものでは無いと思ふ。自分と同じ考へをもち、又自分の詩と同化して喜んでくれる人もすくなくはないと思ふ。自分はこれらの人々に二人丈も多く讀んで貰ひたいと思つてゐる。自分の詩は教養のない詩かもしれない。詩の價値が單に文學的教養の豐富さから賞讃されるなら、自分の詩は零に均しいかもしれない。しかし自分の詩にはそれらの缺如たものを償ふ火があると思ふ。精神に缺けてはゐないと思ふ。

「夏草」と云ふ題は、自分の愛する夏の匂ひを高くしたかつたから擇んだ。この詩集を編むのに又出版に就て米良重穂兄の多大な勞力をわずらはした事を感謝する。又畏敬する岸

田兄に裝幀をして頂いたことに歡喜してゐる。

大正十五年七月十日

千家元麿

桃と鶯

春の曙
人々は未だ眠つてゐる
目を覺したのは花と鳥ばかりである
園生の中でも一番早く咲いたのは桃の花
それであんなに紅いのだ
誰よりも早く御日様の光にふれたので
鳥の中では鶯だ
春の來たのを告げる青い小鳥の鶯だ
朝の一番澄んだ空氣を吸つたので

あんなに聲が清いのだ

梅

い〻日和になつた
歩くのが樂しい
通り拔けた路次の
日當りのい〻塀の上に
眞盛りの梅が白かつた

土筆

春の遊びになくてはならない
土筆

雪

雪が降つたが
大地は伸々してゐる

春の曙

春の曙の女神が
早起きの人間を見て驚く

雲雀籠

草原に雲雀籠を置いて
雲雀を鳴き合はせてゐる
老いたる友達の親しさ

河

河は遊んでゐるやうに流れてゐる春

桃

子供が學校のかへりに桃を折つて來た
嬉しさうに

冬の夜道

冬の夜道に木の影が倒れてゐた
月夜だなと初めて氣がついて
ふりかへつた屋根の上に月があり
もう春も近いと思つた

春の黎明を歌ふ

黎明よ、光と美と力の汝の前に

神聖のをのゝきを感じ
惰眠から目ざめて
成りゆく春の曙の前に
卑しき情はかげをひそめ
朝は淨めの力と喜びの焰で
世界を洗ふ
おゝ春の曙のめぐましき美よ
神も眠りから奮ひ起ちたまふ
汝は宇宙に無比
東端の海洋から黄金の第一の神聖の矢は
山嶺の岩壁心幅ひろく射られ
金無垢の大なる智略に優れ

大膽無比の美と力の奔放な若者は
今しもその隆々とした麗らかな臂を張つて
引き絞つた大なる弓を放つ
ブルデルのヘラクレスのやうに
おゝ目覺しいゆらぐ黄金の朝よ
眩ゆき天使の神聖な翅のゆらぎ立つ時
かゝる時地の諸々の大洋、山岳、原野は
麗らかな朝日に笑ましく哄笑して
森は原始の眼覺めに露うちはらひ
芬々たる千草の花は原野谿谷に優しい明眸を開いて
その艶な唇に笑ましき喜びを浮べる
おゝ朝の野の喜びよ、露に蔽はれたる草むらや

木々の枝に春は綻びて、紅き唇頭を開き
清らかな河のほとりの繁みには
清き鶯の樂しく囀るのを聽く
鶯は清い朝の目ざめの歌で
彼女はその美音で眠れる花を開かしめ
人の心に清きよろこびを生む
をゝ春の曙よ、桃、さくら、菜の花
たんぽゝ、桃の類も我れ一番と朝に魁け
露も乾ぬ森蔭と草むらより雲雀は歡喜の歌を空に告げ
宇宙に無比のこの春の曙を
自分は樂しく期待して
どんな歡樂と光が

今日の眞晝に與へられるか
曙はこれから成りゆく盛んな春の饗宴の除幕式で
準備はすでに野に山に森蔭に出來て
今は天帝の君臨を待つばかりである

早春の散歩

夜そとを歩いてゐてももう寒くない
生温い空氣が快く顔に觸れる
道はほの白く朧ろに續いて
そこらの建物が温い朧ろめく夜の闇に包まれて

その上に星屑が明滅してゐる
星明りの空に道端の庭木が突き出して
もう蕾をもつらしい灰色の枝が
參差として縺れたその間に
微妙な空の明りが漂つて
さ霧が靜かに降つてゐる
自分は恍惚として靜かな早春の郊外の夜道を歩いてゆく
現實の世界は遙か彼方に去つて
自分の眼前には只永遠の安息と
平和な星座と地を籠める温い夜霧と
無數の愛する家々と樹木が
幻燈のやうに淡い燈影に刻まれて浮んでゐるのに靈智を鋭く鋭くされ

肉軀からは不思議な感覺が
今闇の中で醗酵したやうに
大空へ温い大氣の中へ擴り溶けてゆくやうな
觸感に鋭くされる
私は自分の生きてゐる事を感じる
柔しい草や蕾の萠芽が出さうなこんな晩
私は書籍や客間や日々の單調な實務的な
生活から少しでものがれ
朧夜の中を歩み、早春の匂を嗅ぎ
幽瞑隔てる星の大空の方へ恍惚として想ひを馳らせ乍ら
私は生きてゐる、大きく生きて居る事を感じる

雨

びしよ濡れになつて
大きな樹の蔭に入つて
見ると、その樹は幹も根も少しも濡れてゐない
たゞやつと頭を濡らしてゐるばかり
この雄大な樹木にとつては
何と云ふ些少な雨だらう
しかし樹木は靜かに美しく立つてゐた
廣大な樹木
佛陀のやうな樹木だ

見上げると高い葉に
雨の音が天上で靜かにきこえた
雨はやがてこの樹をも濡らし初めた
雫は垂れ、幹も根も濡れ
美しい天の水の中に佛陀のやうに
廣大の樹木は嚴かに浴み初めた

河

のろ〳〵と
土色の水が

音もなく靜かに
大軍のやうに
野から街へ入つた
美しい花咲く野を流れてゐる時の
あの幼さない清さも失つて
今は濁つて旅に疲れてゐる
他國へ入つた兵のやうに

太陽神よ

太陽神よ

早や近く地球の側に
來ませしか
花は咲き
御身を迎ふ
我らが喜びを
傳へんとて雲雀は
御身に近く歌ひ騰る
太陽神よ
近づき給へ
御身の傍にありて
皆、喜び、皆、暖り
樂しと思へば

花は亢奮して咲き
鳥は擧つて歌ひ
我等も擧つて祝がん
を、希臘めく春よ、太陽神は我らの地球に近づけり

春は來る

春は來る
愛らしの春よ
少女ら美しく
羞らひ歩めり

彼女らの身ごもるも近きにあらん
愛らしき天使のごとき嬰兒を抱きて
歩むを見るも近き日ならん

桃よ

桃よ
東洋の花よ
柔やかな眞紅の鮮やかな
三月の曙の花よ
微笑ましい花よ

梅

この一本の梅の生氣
百も万もの花が青空の下に響る

青空

青空の下に生きるなり

春の曙

眠りから
神覺め給ふ
春の曙

梅

大地と共に
神の眠りや梅白し

梅

梅は白く精神の花

桃

雨の中に桃が蕾んでゐる

朝

床をあげてきれいになつた部屋に
窓から差し込む日の光りを感謝して
座る時の樂しさ
毎朝だが、毎朝うれしい

鶯

どこかで鶯が啼いてゐる

實に清らかな朝らしい聲だ

鶯

清らかな處を好む鶯でなくて
あの美しいこえは出ない

春の曙

人間がもう起きてゐる

春の曙
春の曙の女神が
人間を見て驚く

河

大きな河があるかと思ふと
小さい河がある

曙

春の曙は宇宙無比、他に比べものもない

梅

これが人の世か
靜かに梅が咲いてゐる

梅

白梅に
空が清く澄んでゐる

春

春が來た
河は樂しさうに
水は清らかに陽をうつして流れる

自分の想像も清くなる

春

春は仙術者
幻の花が咲く

春

駘蕩たりわが家のめぐりの春も

土筆

土筆摘む化物屋敷の庭に入り

花

花を愛すのは樂しい事だ
神々は愛を與へ給ひ
又美しきものをつくりて
愛させて

人を御身の近くに召し置かれん心なるべし

花

花を愛すは聖(ひじり)なり

櫻

齡古びて
もろき枝とはなれど

倘幼き花の咲く櫻の貴く思ゆ

櫻

その昔位高く貴き人の住み給ひし趾か
古びし櫻のすごきほど美し
只ならぬ庵と櫻の殘りて
朧めける草の生ふるあり

薔薇

薔薇よ、青葉の庭の薔薇の一群よ
側へ寄ると香氣が襲ひかゝり
手をのべて折りとらうとすると
花辨と露がハラ〳〵と落れる
丈高い薔薇の株よ
いつも露が乾かず匂ひに濡れてゐる薔薇よ
私は御前の側へ寄らずにはゐられない
神秘なふくらんだ大きな花の微笑よ
微笑するバラの花よ、聖なる正義のしゐしの薔薇よ

母の聲

女の聲の美しさ
どこかで聞える
春らしい幸福の聲
朗らかに響く笑ひ

桃

桃よ

三月の桃よ
東洋の花よ
燈をつけたやうに
麥の青む畠の中に
明るく亢奮してゐる眞盛りの桃よ

菫

菫よ
長閉な顔して
おまへは咲いてゐるね

浮世離れて
枯草の中に
優しい菫よ
外のものが未だ眠つてゐるのに
もうおまへばかりは目を覺ましたの
本當に待ち遠しい春だね
でもおまへを見て
今日は氣が晴々した
菫よ、有難う
春はもうぢきなんだね
今に皆んなも目を覺すだらう
たんぽぽや蓮華たちも

友達の墓よ
獨りで居るのも一寸の間だ
春はもうぢきやつて來る

秋

櫻の葉がもう落ち初めた
一番早く秋を感じるのはおまへだ
やさしい櫻よ
道を歩いてゐて
おまへの黄ろい葉を見て

私もおまへのやうにさつぱり
不淨なものを振るひ落して
澄みわたる秋に調和したく思つた

春

春よ
明るい春よ
燃ゆる空氣に
木々に花つけ
王様の庭のやうに

どこもかしこも典雅に美しい
こんな美しい土地をもつ
王様に榮へあれ
民は樂しく、勵み
畠は廣く、苦るしむものなく
平和の笑ひ滿つる世界
そんな世界よ、早く來い

友よ

友よ

今年ゝ亦君と
春の郊外散歩が出來るのを喜ぶ
そろ〳〵亢奮病が起ります
燃える林や草叢へ踊り込んで
木の花や草の花に亢奮する時が來た
亢奮するのを笑ふ人は笑へです
春は亢奮しますよ
木の花の亢奮してゐるのを御覽なさい
しかし僕達は野卑な亢奮は喜ばない
典雅の春ですもの
ギリシャ式に亢奮するのです（呵々）

花

オヽ花よ花よ
亢奮する花よ
燃ゆる枝々の上で陽に近く
花は亢奮して居る

春が來た

春が來た　三月が來た

あゝ、先には樂しい月がとつさり待つてゐる
四月、五月、六月、七月、八月
未だ〳〵どんなに樂しい幸福な季節がつゞくだらう
花は秋まで咲き絶えず
空は美しく、日の光は麗らかに
地は愛するものに充ち
神々しいパラダイスが出來上る
恍惚の月々は
皆んな艶な、亢奮した緣のすが〳〵しい花と
美しいカレンダーをもつてくる
あゝ想像しても喜ばしい
愛する月々がこれからめぐつて來るのだ

五月、六月、七月、八月……
麥が伸び、日の光りに透き徹り
蛙が啼き、藤の花が垂れ下り
青葉が世界を埋め、深遠な夢は深くなる
燕も遙々菖蒲が咲く輕快な田圃の國へ來るだらう

何の花か

何の花か
白き濃やかな花つけて
野に立てるは

すが〳〵しい裝ひの
綠の中に立てる

野の少女

野の少女はよし
粗末な衣づけて
脛出したれど、眼は黑く
顏赤く健やかに笑ましく
我を見て敏捷に籔の中へ馳け逃れ行けり

春の夜

春の夜の汽車の内
都の春見に來りし客混みて騒々し
話の種の多くて彼等は
野卑に笑ひ興じ合へり
やがて疲れて人々はやゝ落着き我にかへり
車内靜かになれば
窓外に月あり
煙れる景色の無限の味ひよ
燈火のチラ〳〵と飛び〳〵に現はれ

蛙の聲が喧しく聞える
あとにした歡樂の都に未練はない
おゝこの月明の田圃の美しさよ
爽やかな夜の靜もるをつとりした田舍よ
そこに靜かに日々の業務に勵む人々の幸福よ
涙ぐましい夜かな

春の夜

春の夜だ
子供は寢しづまつて

輕るく安らかな寢息がきこえ
妻は燈下に衣を縫ふ
私も彼女も默つてゐる
火のいらなくなつた靜かな温い夜は私達の家にも幸福を齎らす
戸外は朧ろに煙る月夜
遠い田圃の方から蛙の聲がふし面白く響いてきこえる
靜かな、永遠に近い夜
無限の味ひを感じる夜
私と妻はこの夜の靜かさを
破るまいとするやうに默つてゐる
私は妻の下を向いて燈火に蔭になつた顏を眺める
その姿は滿ち足りて平靜である

貧しいけれど私達の周りに
春の夜の平靜な氣分は
口にし難い幸福な思ひを通してゐる
あゝ他に何の不足があらう
子供が丈夫で良く育つてさへくれゝばそれに越した幸福があるだらうか
私は何か話しかけたくつて
しかし、その言葉を出すと涙が溢れさうなので、口を噤む
妻がホッと吐息をして體を動かした
足がしびれるので座り直したのだ
「もう縫へたのかい」と自分は平凡なことを聞く
「未だまだ、中々よ、先きへ御休み下さい、もう何時でせう」
二人は言ひ合したやうに時計を眺める

氣がつかない間に時計は停つてゐる
私は安物のニッケルの目覺し時計を手にとつてねじを巻く
「九時頃にしてをこう」
「今に汽車がつくと分つてよ、先き着いた笛が七時何分のですから、今度は九時何分ですわ」
暫らくしてその汽車の音が遠くからこの町へ近づいて來る響が、聽える
停車場が近くなつてピーと笛を鳴らす
二人は默つてその音をきいて時計を直ほす
私は幸福とは
こんなものだと思ふ
平凡で何ごともないが
そこに無限の味ひがある

私は默つて只ほんやり
女の縫ふ手先きを眺めてゐるのだ
「先刻から何なさつてゐるの」
「御前の縫ふのを見てゐるのさ」
「御仕事なさらないの、御退屈でせう」
「うん餘りいゝ夜だから、こんな晩は何もしないでゐても退屈しないよ」
「では御茶でもいれて召上れな、御菓子が一つ戸棚にとつてありますわ」
自分は喜んで立上る
「そつとして下さい、目を覺まさないやうに」
「よし」私はそつと戸棚から皿に殘つた餅菓子をもち出す
「本當にいゝ時候に成りましたわ……これでHの着物も縫へて、この着物、遠足へ着せてやるのですよ」

「あゝ遠足か……、Hの奴嬉しいだらう」
「餘り汚いなりさせて、遣るのも厭ですものね」
「うん、さう、然う」

愛する人達

愛する人達が方々に居る
こゝに居て思ひ出すと
懐しく楽しく思ふ
ハガキを書き乍ら
彼の手に屆いた時の喜びを思ふ

心と心の通じるのを感じ乍ら

私の詩は

私の詩は日常生活のありふれた詩である
私の見、私の感じた生命の詩である
諸君と同じく私と云ふ一個の人間が、愛し、憎み喜んだことを
單純に卒直に歌つた詩である
私の詩は誰にも親しく喜ばれるだらう
私と同感の人は多いだらう
私は生涯を只より良く生き

より良く歌ひ度い
私は人生の大波に漂はされる人間である
私は悲しむ時もあるだらう、嘆く時も多いだらう
しかし私は結局生きることを喜び歌ふ人間だ
私は實在の歡喜、私の胸の中から湧く生命の歌を高らかに歌ふほど、幸福はない

一日

一日とは何だらう
私は一日の喜びを歌はう
誰にも親しい喜びを歌ふのが自分は樂しい

おゝ朝
誰か朝の清淨の美を傳へ得やう
朝の美、朝の色を傳へ得やう
かくも優しくかくも神秘な朝の喜びを歌ひ得やう
地球に滿ちる朝の爽やかな
祝福に滿ちた歡喜を歌ひ得やう
身も魂も淨化するやうな勇ましい
快い朝の歡喜を歌ひ得やう
幼年の朝、青春の朝、老年の朝
朝はいつも若々しい
朝はいつも快い
日は未だ登らない

然しもうその近いことが分る
除ろに朝は明け離れて行く
快い朝風は上天から吹き落ちて來る
少し寒い位、淨らかな天國の息吹のやうな風は
眠つてゐる家々や樹木を颯々と吹き拂ふ
朝の家々！
私の眼には今それらが映つて來る
地上の家々、神の善良な民の家々が
可愛ゆい姿で、除々に光りを增して來る
淨らかな空の下につゝましい
朝の屋根々々の樂しさよ
戸は未だ開かれず、煙は未だ擧らない

空はその上に滴る如く聖らかに青い
快活な地上の住民は目覺める
神に愛された民族
各國の子供等は目ざめる
あゝ彼等は小さい家の戸を開き窓を押し擴く
天日は彼等の上に喜々として舞ふ
人々は昨日のやうに働きに出て行く
地上に於て人々は何の爲めに働くか
彼等は何を築かうとするのか
彼らは何を最上のものと成し
何を排し何を學ぶ
私は地上の人類に就て考へる

地上は本當に神の善良な民の住居なのか
そこは淨土であるか、そこは穢土には非ざるか
こゝには調和ばかりはない
あらゆる不調和がこゝでは戰つてゐる
善のみでなく惡がはびこつて居る
平和のみでなく、動亂が多い
平和は攪亂
サタンの國は廣大である
神の善良な民はノア一人の昔と同じか
自分は否とも然りとも云へない
自分は克服すべき惡の所有者である事を告げる
自分の人格の完成は個的の惡を亡ぼして

全體の善に從ふことである
善は偉大である
善はあらゆる宗教の源である
善は實在である
物質的幸福は完全の幸福ではない
物質的幸福は不完全である
肉を滿して靈を滿たさず
利己を滿して他人を滿たさない
自分が腹一ぱい食つて滿足しても
他人はそれで餓へが滿足しはしない
實在の不思議よ
我々の此世の滯在期間は不定である

あるものは永く、或者はきはめて短かい
我々は暫しこゝに足をとゞめて他界へ去る
併し自分が死んでも
地球は死なない
人類は日々の營みを續けてゆく
死ずるのは個人であり
死なないのは人類である
個人の内の人類的慾望を達したもののみ
永生を得る
個人が亡びて全體が生きる
善は利己的ではない
悪の幸福は假在である

現世切りのものである
然かもその現世に於ても
美の幸福は得られない
人を傷つけて平氣なものはない
人に損させて自分が徳しても
決してその人は眞の安心は得られまい
眞の幸福は得られまい
かゝる人の心の生活は寂しく荒んでゐるに違ひない
家族を餓へさせて自分ばかり樂しむ親は
何と云ふ不合理の親だらう
かゝる人の良心は痛むに違ひない
彼の愉快は奪はれて心は暗黒に苦しむだらう

虐げらるゝ者は不幸だ
併し虐げられるものゝ心のまるで光りのない暗黒より幾倍優しか分ら無い
大なる善を信じるものは幸だ
その人には悪の無力が分るだらう
悪は亡びるものである事を知るものは賢く強い
信仰の前に不信は影が薄い
善は悪に對して無抵抗である
無抵抗は敗北ではない
敗亡に見えて勝利である
異常な勝利の無抵抗である
ソクラテスは自己の勝利を信じてゐたから
悪がいかに無力のものに見えたらう

正義を信じる者は強い
悪は消滅すべきもので善は永遠に生く可きものである
悪は力のない存在！
善は偉大な實在である
善の側に悪を並べたら
その美と醜は一目瞭然だ
こんな露骨な比較はない
善は四邊はばからず輝き、悪は首垂れてゐるだらう

人々は

人々は何を目的に働くか
働くことは善だらうか
家々を作るのは善か、畠を作るのは善か
勞働は善である
併し平和を愛するものは尙ほ善である
心の爲めに働くものは善である
彼らは神の優良の民である
一家を養ふものは善であるが
全人類の心の糧をつくるものは尙ほ善だ

人類の心を漁る漁夫は
魚を漁る漁夫に勝る
人類の畠を耕す百姓は
野菜をつくる百姓より勝る
自分は彼ら擇ばれたる人々を讃美しやう
豫言者、宗教家、思想家
正義と平和の爲めの戰士
印度の爲めに正義を叫ぶ豫言者が投獄されるや
民衆は彼を救はんとして起つ
民衆は正義に從ふ
偉大なる無名の人々
彼らは侮り難い人々である

神のために事あれば立つ聖勇の士である
自分は賞讃すべき仕事をもつ人々と共に
無名の人々を讃美する
君達も亦地上を飾るのにふさわしくない人は一人も無い
地に耕す者も、海に漁る者も
文明の圏外にある
肥桶を擔ぐ無智な百姓も
凡てが人類の偉大な肖像畫の中の肖像であり立派な彫刻である
ゴオホは郵便配達の像を飾り
搖藍の女を描き
ミレイは農夫の偉大な福音に滿ちた繪畫を作つた
あらゆる役割が美しい

地上を支配するのは
擇ばれた權威者かも知れない
然し地は地に於て盡されない
大なる神秘は存す
天の前には人は恭謙な赤子である
死の前には誰も苦痛を喚起す
神の救ひを叫ぶ平等の連中である
權威は物質界のみを支配しない
精神界を支配する優劣が問題だ
各自の人が各自の道を歩み
その生涯を、最上に幸福に送るがいゝ
おゝ人間の生涯、努力と精進

あらゆる艱難を破つて
名を成し業を成就する生涯
人生の存在はをろそかには出來ない
その生を最高に貴る事は自然の命令である
衣食足りて滿足ではない
深い滿足、死に打克つ道を歩むのが
人間の慾望である
戀愛の滿足
それは幸福だ
子孫の繁榮、それも幸福だ
然しそれは利己的幸福だ
最高の幸福は學んで知り

自己の完成を果す事だらう
忠實に自己の生の完成を成す事だらう
自己の爲めより人類の爲めに盡す事だらう
誰かその生涯を滿足して死んで行つたか
誰か凱歌を擧げて此世を去つたか
おゝ死！　死！　恐しい死
然して生は定まらない動搖に滿ちてゐる
自分は生の浪に漂ふものである
右し左するものである
自分は岩の如く此地上に根ざして
生の浪に當つて碎かれない强さと不滅のものを有ちたい
自分の築くのは脆い〳〵

風の方向でその位置を轉づる砂丘でありたくない
年月の巨大な手の爲めに存在を失ふ果敢無いものではありたくない
けれど凡てのものは消えて行く
消えてなくならないものは
大自然と同化し合體し得たものである

日の光

日の光りの美しさ
草を輝やかし
木々の葉を輝やかし

輝き澄るゝ戸外の歡喜
三月の大地の美しさ
草の芽の愛らしさ
草の芽の美しさ
蕗の芽は金色に萠えて
不思議な形で膨れはぢけてゐる
神秘な種と芽の繁殖と、生長よ
幼い芽達の可愛い姿の神秘
私はあらゆる木の芽と草の芽を愛す
苗床の苗の二葉の美しさ
をゝ地は產み、地は殖やし
大地は休まず、大地は創造の火に温る

を〻上天の太陽の光りに依つて
膨れ、誘はれ、暗黒から
生の光明へと進轉する萬物の種の生長の喜びよ
嬰兒の喜びよ、嬰兒は神秘な生の深淵の中を
或る見えない手に依つて導かれ
生の大洋の中を泳ぐ
母は彼の周りを絶えず離れず
彼を抱き、彼の手をとり
彼の保育に勵む
神秘な愛のつながりが
二つの形體を結び
創造の光明は二人を繞り

地の暗夜から光明の地へ到達する
を〻生長の喜びよ
嬰兒は見、知り、動き、笑ひ、肥つた手足をさしのべる
内なる力は彼を促し彼を除ろに生長せしめる
彼は匍ふ
嬰兒の匍へる形ちの愛らしさよ
嬰兒をめぐる世界はどんなに神秘に奇しく樂しいだらう
どんなに清純で、どんなに光明に充ちてゐるだらう
嬰兒にも苦痛はある
併し嬰兒は忽ち愛に依つて救はれる
嬰兒よ、人類の幼年よ
いかなる人も通過して來た幼年よ

人よ
汝は如奈に神秘に依つて愛撫され
汝の健やかな呼吸をしつゞけて來たか
私は顧ゐ、幼年時代の喜び
母の愛、偉大な母の功蹟は讃頌される
私の魂を形成し私の生長に重大な關係のある母の愛
或る母はその息子と離れて住む
息子は海へ遠く去つて永い年月歸らない
母は彼女の兒の事を年中苦にして
彼の生死を案じてゐる
置き去りにされた老ひたる母はこの最愛の兒の
幼い時の姿を夢見るやうに憶ひ出す

彼の聲、彼の姿
彼の特色のある癖等を想ひ出しては
いかに彼女がその息子を手鹽にかけて愛撫し
掌中の珠として愛したかを思つて涙ぐむ
自分の側に在りし日の彼女の息子の幸福を思ふ
彼女の息子の愛らしく賢かつた昔を思ふ
母は憶ふ
どんな世界へ行つても
彼女ほど彼を愛するものは無い事を
彼女程自分の息子の爲めに盡せるものゝある可きで無い事を思ふ
然し彼女はもう息子から世話して貰ひたい年である
別離の永い年月、彼女は

一日として息子の事を神に祈らない時はない
一日として彼の歸宅を考へない時はない
忘恩の子は歸らない
彼は今までも度々母に難儀をかけたが
一錢の蓄へもなく
何處の世界を放浪してゐる事か
女から女と追つて零落に零落を續けて
不幸な運命に彷徨つてゐるだらう
彼女は息子から消息を知つてからもう
年月は永くなる
海の彼方へ去つた事は知つてゐる
他國へ去つた事より深い消息もない

息子の安否は解らない
彼女は死ぬ迄に今一度彼を見たいと思ふ
寂しき寡婦である彼女は
此世に只彼女の息子より今は眞に愛するものはない
オ、偉大なる母の愛よ
母の愛！　母の愛！
誰かその愛の地上の愛に於て
あらゆる愛の内に於て
彼女の母に勝るものを知り得やう
彼女の愛の敵は
戀愛である
息子は彼よりも身分の低い

さうして大して美しくもない女に迷つて
不義理を積んで海外へ去つたのである
オ、戀愛の力と母性の愛
その二つの引力は稀な悲劇を生むが
調和してゆく事が普通である

夕暮

夕暮の喜び、眠りにつく朧ろな大氣の中の平和の景
四季を通じて私は夕暮の快美さを歌はう
夕暮の散歩、夕暮の微妙な和らぎ

奇しく美しい微妙な心を魅するよろこび
私は涙ぐんでその美しさを讃へる
一日の勞働の終り
人々は樂しい家路へ
足も輕く、その愛する家族のもとへ歸つて行く
各々の家庭に仕事の後の慰藉は待つてゐる
空氣は人々に御飯を甘美しく食べさせるやうに
澄んで香つてゐる
まるで親切で優しい女のやうに
をう兄弟はどんなに一日を樂しく働いたか
どんなに疲れたか
夕飯はどんなに甘美しいか

夜はどんなに樂しく妻君と並んで眠るか
勞働者の家庭の飾り氣のない
卒直で單純な夕べの光景よ
妻君は膳の用意をとゝのへて待つ
一本の酣德利は膳の上に立つてゐる
足を洗ひ顏の汗を流した夫は
いかに樂しくその膳の上の盃を手にして
好物の肴に舌鼓を打つだらう
星、夕暮の暮れ惱む空に靜かにあらはれる星の優しい淸い瞬きよ
地上の勞苦をねぎらうやうに
海上の空にも、山々の頂にも、野の空にも、鮮やかに滴るやうな星は新しい世と共に生れてくる

その淸い光りその嚴かでやさしい神秘な姿
人はキリストがそこにあらはれたやうに感じるだらう
あゝ太陽が沈んで靜かだな
畠も色彩がもう分ち難くなつて
日の光の下で一日樂しく遊んでゐた人々も家路へ着いた
樂しかりし一日の終りの平和さよ
百姓は鍬を肩に、疲れて、默つて朧朧とした姿で畦道を歸つてゆく
その姿には何か人を打つ神秘な力がこもつて居る
蛙がコロ〳〵と田圃からは啼き初める
空氣は新鮮で、草の匂ひが甘く漂ふ
黑ずんだ森の中から家の燈火が靜かに瞬く
おゝ疲れたものに魅力のある夕暮よ

野の夕暮の神秘よ
腹の減つたものに夜はうんと喰ひ、飲み、眠りの床が用意される
何といふ幸だ、一日働いて不平もなく、夕べに家に歸つて、夜安らかに眠る身は
見ろ、夕暮の沸き立つ地上を、靄の中の人々の往來の烈しさを、この精力的の光景は
この人間をぶちまけたやうな地の活氣は、然うして又空のあの美しい靜かな色は……
私は時々感動して咽びたく成る
この力はどこから私の心に傳つてくるのか
突然に遇ふた光景を見たものゝやうに
感謝にをどるこの心は
をゝ愛よ、聖なる愛よ、人々が睦み合ひ、平和に幸福に暮らすことは何と云ふ美しいこと
だらふ
皆んなが心を一つに併せて樂しむことは何と云ふ樂しい事だらふ

夜

夜は神秘な冷やかな愛撫で土の上に晝間の熱を醒まして
花を冷まし、草を蘇らせ
明日健やかに目覺めるやうに
穀物の上に恵みの露を蒔き散らす
眞晝の炎熱の赫い輝きの變りに
蒼い夜は是の清淨な務めを果しに來る
人々は眞晝が地に大切なやうに
夜が偉大な務めを果すのを忘れまい
夜は人々に眠りと休息を與へるのみでなく

空氣や土や植物に多大の恩惠を施すのである
夜を通過して、晝は完全なのである
私は夜を愛す、冷やかな星は熱した身體に何と言ふ爽快な慰めだらう
私は晝の歡喜と夜の慰安を讃へる
晝が父であるなら夜は聖らかな母である

自然に就て

自然に就て學ぶことは
どんなに多量だらう
朝に就て學び
夕に就て學び
晝に就て學び
夜に就て學ぶ
感受するよろこび

優れたもの

優れたものは多い
人間の内にも
又植物の中にも
自然は夜と晝とに

素晴しいものを造る
花の美しさ、花の優しさ
花の姿は不思議である
薔薇の美しさ、薔薇の聖さ
聖母の飾り、野の花の立派さ
おゝ朝の花よ、露に濡れて
未だ半開の花の何と云ふしほらしさ
夜の床から目さめる花達の喜びの顔々
朝の淨さにたへやらず開く
神秘の唇の花
花は夜と朝からその色を貰ふのだらう
然うして晝に光明の鍵でその小さい扉を開かれるのであらう

尼樣のやうに清淨な花達
清い〳〵花達は
無垢な生命のしるしである

嬰兒

嬰兒の美しいやうに
老人も亦美しい
死の傍に立つて
哲學者のやうに老境の平和にある老人は
平靜な態度で

血の氣が多く、無鐵砲で
純潔で向きな若者に
靜かに眞理を說く
私は老人を讃美する、老人は賢い
白銀の髮長き老人よ
老人は美しい、實に美しい
彼は神秘を知つてゐるやうに
優しく柔らかに平和を說く
元氣な若者は樂しんで世故にたけた老人の語ゐを聞く

春の日

美しい明るい春の日
郵便配達はいつもより早く
友のハガキと雜誌をもつて來て呉れ
ゆつくり腰かけて話してゆく
煙草を喫つて茶を飲んで
梅の咲いたことや鶯が谿の方では啼いてゐる事を話し
又鞄をせり上げて
エッチラオッチラ歩いてゆく
呑氣な田舍の郵便配達よ

麥が青んで桃が咲く
明るい里の郵便配達よ
君が來てくれると
家の中が急に明るくなる
子供が受取つて私の手へ
澤山もつて來てくれる郵便を
私は机の上に積んで
雜誌を開き、ハガキをよむ
たのしい春の午後である

男と女

男と云ひ女と呼ぶ
イブとアダムは
實在の果實である
偉大なる果實である
男性の喜びよ、女性の喜びよ
兩性はその兒を產む爲めにある
その兒を產む爲めに
自然は彼等に命令する
彼等は公ぴらに愛し合ひ

その任務を果たす
人類の穂を繼ぐ
男子の役目と女子の役目は立派で
偉大である
婚姻は夜約され、出産は祝福される

大なる悅び

自分は大なる悅びの歌を歌ふ
神來の感興は來り
倦怠は忽然として去る
蓄積した生氣は迸る

をゝ神來の歡喜よ
虛無の深淵の上を飛躍する喜びよ
束縛は解れて、解脫の喜びは來た
私は永遠の一瞬を生きやう
私は理法の指し示すところへ進んで行かう
私の歌を聽け、私の智能の照らす暗夜を貫く光りを見よ
噫、光りは繞る
光りは歌ふ
光りの歌ふを聽け

生の神秘

生の神秘
私の眼に見えない
形ちの無いもの
靈魂の喜びを歌ふ
盲目にも啞者にも與へられて居る喜び
文字を知らない、無學のものにも與へられた喜び
暗黑を貫く
一閃の光明
そは人々の心に喜びを與へるもの

愛
悲しむものに笑ひを與へるもの
樂しき愛
こゝに五人の人があつて
隔て無く喜び合へる愛
愛位單純な光明は少い
不和をひろげるのは憎みである
不幸を生みつけるのは憎みである
憎みは恐しい
憎みはあらゆる罪を生む
その反對に愛は
あらゆる喜びを人々に生みつける

憎は殺すが愛は生かす

憎みの顔はゾッとさせる
憎みの顔は醜悪である
愛の顔は美しく聖らかだ
神秘な愛
どこから來るか知らないが
どこにもそのやさしい火をともす愛
神秘な一つぶの平和の種
眼に見えぬ、然し感じ得る
神秘な働きをもつ愛
を、愛は働く
愛は人々を幸福に導き

天上の樂園へ案内する
愛は男女を嫁せ
愛は朋友を作り
愛は敵と敵とを和解させ
不幸の力を奪ふ
愛は萬人の住家であり
憎みは萬人の敵である
憎むことの不幸よ
憎むことの悲しみよ
憎むことの苦しさよ
愛することの樂しさよ
自分は憎む事を廢めやう

愛することの憎むことに勝ることは
比喩を絶して居る
自分は愛することの至福を思ふ
心に闇なく悲しみの影絶え
無限を貫く光明に漂はされる幸よ
を〻愛の香ぐはしき匂ひよ
愛の明るい光りよ
愛は光りである
愛は純潔な人間の生命である
正しい人は
愛なくては生きられない
人がそれなくては生きられないのは愛である

愛は本能である
愛の玉座は人類生存の中心にある
愛は人類の太陽である
他のあらゆる徳行の源である
愛は増加であり、無限に通じ
憎は減退であり、息もたへ〴〵の最後である
愛の息は人を健やかにし
憎みの息は身體を害ふ
を〻愛の神秘よ
愛の奇蹟よ、喜びの源
平和と法悦の源
愛は天國のものであり

憎みは地獄のものである
愛は生の始めである
愛の天地は人間の住家である
神の善良な民の住家である
私は愛の玉座を禮拜する

喜び

喜びはここにある
喜びは壓迫のないところにある、遠慮なく
生の樂しみを味へるところにある

心の儘に振舞へるところにある
不自然の壓迫のないところに喜びはある
拘束のないところに喜びはある
不自然の壓迫のあるところに苦痛がある
人は自由に生は樂しいものである
生の樂しみを奪はれるところに苦痛はある
生の樂しみを味へるところに喜びはある
苦痛は人が不自然の狀態に置かれる時に生れる
自ら不自然の狀態に進んで入るものは馬鹿である
その人は苦痛を自ら求めてゐるので
その罪は、外界になく、自己にある
生の喜びを殺す社會は不自然な社會で

萬人が樂しめる社會は本當の社會である
生の樂しみを奪つて生きる社會は正しい社會ではない
人生は綠の野原のやうに
日の光溢れ、美しく自由であるべきだ
喜ばしき人生であるべきだ
苦しい人生ではない筈だ
苦しい人生は不自然が多いからだ

自由

牢獄は不自然な生活である

自由の拘束はどんなに辛いだらう
どんなに苦しいだらう
然し滿期出獄はどんなに嬉しいだらう
明日出獄と云ふ晩は
その幸福な人々ばかりが
別の監房へ入れられるのださうだ
そこで最後の一夜を明すのだが
誰も嬉しくて眠られないさうだ
それは想像しても樂しさうな事だ
誰もどんなにその自由となる解放の日を待ちのぞんだらう
その時が明日なのだ
不思議なやうに年日は經つたのだ

人々はその知人や、親のある人は親に
妻子のある人は妻子に逢ひにゆく
喜びを先づ胸に浮べるだらう
然うして再びこゝへ來まいと自分に誓ふだらう
あゝ自由に心に壓迫を感ぜず
重荷を感ぜず話し合へる事の喜び
不自然な壓迫からのがれる喜び
心は勇躍して寢つかれない
明日、自由になる日
をゝ自由よりいゝものはない
自由は廣い綠の野原だ
花咲き溢るゝ綠の野原だ

石と鐵との圍ひの中の生活は
何と言ふ不自然の生活だらう
あゝ綠の野原にも比へたい
人生である、樂しい人生である
愛、喜び、日の光りの滴り
世界はどんなに美しいだらう
どんなに新鮮だらう
風、風も囚はれ人には
その自由の歌が羨やましくきこえるだらう
晝も夜も希望のない牢獄は
何と云ふ惡夢の世界だらう
何と云ふ悲しい處だらう

緑の野原よ、自由の國よ
希望と幸福の世界よ
それでのみ人は生きられる
不毛の土地は怖ろしい
そこで人は孤獨で死ぬだらう
愛するものに逢へずに
くらすのはどんなに辛いだらう
人は社會的動物である
人は孤獨では生きられない
人は友無くしては生きられない
人は戀人なくしては生きられない
人生は伴侶なくては生きられない

自分の心を語り合ふ人がなくては生きられない
喜びを分てる人がなくては生きられない
困つた時はどんな人でも友達になれる
人は誰か語り合ふ人なくては生きられない
旅で偶然知り合つて、暫時一緒にゐて別れた人のことは
いつも樂しく忘れられない
その後音信不通でも

涙ぐむこと

涙ぐむことは多い

私は海に泳ぎ戯れてゐる人を見て
人間の愛らしく、自然の美しいのに目ぐんだ

旅で

私は旅をして山路で行き暮れた時心細かつた
足を早めて、村々を通りぬけ
やつと籠の町の燈火が見えた時は
喜んで涙ぐんだ
山々の黒ずんだ背の上に
凄い新月がのぼつてゐた

そんな景色は忘れられない

山の中で

山の中で茸採りに行つて
連れとはぐれた時
私は一人で心細かつた
いくら呼んでも返事がない
私はだん〳〵泣き聲になつた
向ふでも探してゐるのだと思ふと
尙早く逢ひたかつた

一人で林の中を抜けてくる時は
妙にこわく寂しかつた、私はブンブン怒つて歩いた
つれがわざとはぐれたのだらうと邪推した
小雨がポツ〳〵降つて來た
私は怒りと心細さでワク〳〵して家へ歸つた
つれは家へ歸つて私を見ると怒りつけた
「どんなに心配したか知れない、これから探しに行くところだつた」と叱つた
私は嬉しくて、がつかりして怒る勇氣もなかつた

天地

天地は柔かに
夜は薄絹をかけたやうに
月は大空に熟睡してゐる
をつとりした光りが下界に射しこみ
林の中はへんに明るく
梢には星がサファイヤのやうに煌めいてゐる
土が軟く踏む足に快くさはり
空氣が温く新鮮に肺を滿たす
どこからか花の亢奮した匂ひが漂つてくる

甘いやゝにが味のある青々した匂ひ
私は夢見るやうに彷徨ふ
町の燈火は眩しく、餘りに人が雜沓してゐて
何だか刺戟がこわいやうで動悸が昂ぶる
私は心臟をさへて、眩ぶしい、きらびやかな
町の燈火を避けて
靜かな林の方の物蔭に佇む
オ、歡樂の春の夜よ
私は星と親しみ、人を避ける

自分の生涯

自分は願ふ
自分の生涯が悔ひなく
善き日の下に
働き勵んで樂しく在ることを
自分の生命の焰の明るく
常に朗らかに
暗を貫いて燃え
その火に依つて
暗きに沈む人達も照らし

天國さして御榮への道を歩みたい
我が願望よ、常に
偉きく、常に健やかに
義しき道へと歩みゆけ
力の無い人々が歩めぬ道を
歩み行く者に幸あれ
弱き人々の執着より離れ
汝が正しと思ふ道へ
強き兒よ、歩め

妻よ

妻よ、都會を脱れて
田舍へ行かう
幸福を求めて
健康の土地へ住はう
山は朗らかに我等を迎へん
青き地はゆく雲の影を映して
驟り照る空は我等の頭上に
四時に明るく日の熱き里へ
樹木の梢は樂しく生ひ繁り

緑滴り、花は燃え
谿は碧き淵をなし
泳ぎゆく魚も透いて見ゆ
我が憧れの土地へ行かまし
我等の内の生命の芽を
濁さず、涸さないために
我等が生は樂しく
我等が夏は緑豊かに
我等が生の終りの日に
悔ひ無く暮らし樂しまん

道は險し

道は險し
人生の道は險し
されど心落す勿れ
踏み出でし道を
いや遠く歩み行くべし

詩人よ

詩人よ
天國は汝が胸にあり
汝が生命の焔にあり
汝が焔をもて眞理を照せよ

心の暗い時

心の暗い時
心の悲しい時
そんな時私は祈る
心の闇に閉される時は
自分が惡い思ひに濁る時である
常に朗らかに
生命の火の燃えてある時
喜びである

自分よ

自分よ

常に停滯せず
常に流動せよ
常に元氣に流動せよ
惡い思ひがつまつて
暗く心の沈む時は
生命の流動しない時である
何かに囚はれてゐる時である

ミレイ

ジャン、フランソワ、ミレイよ

御身を思ふ
日沈み、夕靄は地を罩め
廣い野の上に星瞬く時
新鮮な夕の大氣の裡に去りゆく一日の光榮の
終りに自分は汝の永遠の姿を見る
汝の描ける畫布の崇高な眞實と美を思ふ
彼は聖なる姿して自然に自分を導くやうだ
善良の父にして貧しき者の味方の働き人たりしミレイよ
をゝジャン、フランソワ、ミレイよ

我は貧し

我は貧し
我が父も富みたれど
貧しく死せる時
遺産とてはなかりき

不幸な人

私は不幸な人々の事を思つた

彼等を思ふ時、私の胸は重くなり
悲哀が全勢力を以て私を蔽ふのを感じる
或晩、私は用があつて町を通つた
場末の緑日の中を通つた
そこには多くの店が、燈火をつけて道端に並んでゐた
安い玩具や、細々した日常品を安く賣つてゐた
安いはんぱもの〻化粧品とかシャボンとか下駄とか
そんな品物はよく、只價が安いので
貧しい身なりの人々がそれを買つてゐた
往來は人で充ちてゐた
荒んだ容貌の、職工風の青年が、群れて
何か求めるやうに餓へた顏をしてブラ〳〵と

道ゆく人を物色して居た
私は彼等の顔を見て急いで通りぬけた
その青年達は、自分の望んでゐる快樂も容易に得られないのに失意の色を浮べてゐた
私は悲慘な氣がした
ふと私は一人の少年の事を想ひだした
彼はカフェや活動が好きで
飲酒と賭博と漁色に興味をもち
喧嘩早いのを誇りとして
不良の徒に交る事を光榮としてゐるやうな
一人の友を
私は最近彼の母が遠い田舍で死んだときいた
その喪中に逃げ出して來たのだそうだ

私は憂鬱になつた
町は嫌ひだ
商店も利己的で
そこにゐる主人達で
餘り善い顔をして居るのを見ないではないか
單純ないゝものはこゝでは滅びてゐるのだ
現代の文明は人間を滅ぼすものだ
いかに多くの人が滅んでゆくか
現代に求めるものはない
現代の不幸と暗黑に反抗して起つよりない
あゝ皆んな貧窮が重いのだ
比較的輕いものも、いつどん底に沈むか不安な時

貧窮は人々の胸を壓してゐる
文明は人を滅ぼしてゆく
都會は人を滅ぼしてゆく

幸福

嫌ふ可きもの
憎むべきもの、醜いものは多い
けれども愛すべきもの
讃ふべきもの、美しいものも多い
人の害になるものも多いが

有用なものも多い
私は美しいもの、心を悅ばすものを
自分の友に選ばう
私は幸福を歌はう
現代人の顧みない幸福を謳歌しやう
それが諸君には夢のやうに見へたり
無用に思へるかも知れない
私の歌ふ喜びや美しさは
諸君の口腹には適さないかも知れない
諸君の求めて居るものと異ふかも知れない
併し私は諸君がわけなく得られる幸福が
實は私の歌ふものであるかと思ふ

私は夢のような美しいものを歌ふ
自然の美しさや心の喜びを主題にする
私は此世に一人や二人の詩人があつてもいゝと思ふ

風

風！　風
輝いた風景の中を
吹き廻す風の快さ
花を吹く風の明るさ
もうこれは春の息吹である

オ、風よ　明るい風よ
麥は青く、桃は紅く
辛夷は白く燎乱と咲き乱れ
日の光りは雲を貫いて
畠に落ち、風は輝いて吹く
オ、風よ、三月の輝きをもつ風よ
花の間を吹きすぎ青空に歌ふ風よ
春の天使の息吹よ

春の畠

雨が熄んで
陽が黒い雲を貫いて
明るく花を照らし、畠を照らした
陽の中に桃や白い李や發芽した樹々や麥や草の綠が一齊に輝き
空には雲が乱れ、青空が開け
咲き乱れる花の果樹の上に虹が顯れ
ミレイの春を想はせた
その神々しさ、快い風が花の木々を搖り
戯れるやうに吹きすぎて

花は翻へり、麥や草は靡き
世界がぱつと輝いた

快樂よりも

私は快樂よりも德を慾望する
肉慾の一天張り
金錢慾の一天張り
それらが人の全部と思ふものは禍だ
倫理を無視しすぎる行爲は
人ではない、動物だ

倫理

倫理を無視する
いびつな心のものは呪はれてゐる
惡を以て善に勝ち
醜を以て美に勝てると思ふものは
何と云ふひがんだ、いびつな心だらう

金

金があればあるで
金がなければないで
樂しみは多すぎる
金で買へない樂しみの多さ
金にエンのない樂しみの多さ

何にでも

何にでも
精力的である事は愉快である
仕事にも
又遊びにも
精力的であり、歡湧き盡きぬことは幸福である
生活と仕事とが
ぴつたり調和してゆく時の喜び
生活も豐富に精力的に
仕事も豐富に精力的に

自然よ

自然よ、汝は
歡湧き、盡きず
樂しきかな

野兎

夜の銀座からの歸り道
もう更けて、ねしづまつた

朧月の白い田舍道を歩いて來ると
フト道に動いてゐる黑いものがある
猫かなと思つてそばへ寄つて見ると
黑い野兎である
自分は「をや」とをどろいた
野兎は道をチョコ〳〵と走つては
何か考へるやうに耳を立ててうづくまる
自分は捕へてやらうと思つて
そばへ近づくとチョコ〳〵と逃げる
まるで追ひかけられるのを樂しんでゐるやうに
捕へさうになると、ぴよんととぶ
道の側には並木が列んだ小川がある

若し追ひつめてそこに兎が落ちるといけないと思つて
用意しい〳〵追ひかけて
自分は蝶々でも捕へるやうに
帽子を手にもつて
野兎を帽子で伏せやうと追ひかける
二十分位そんな事してゐたが
どうしても捕らないので
可笑しくなつて捕へるのは止にした
然うして、朧なはつきりしない
影のやうな兎がほの白い道を走るのを見てゐたら
可愛ゆくて涙ぐんだ
靜かな春の夜の往來に

自分と野兎とたつた二人で
追ひかけつこしてゐるのを
悲しいことのやうに思つて

春の朝

もう目がさめた
百千鳥の聲が窓外でさかんである
赫々たる春の太陽は
地平線から焔をあげる
金と焔の春の大王よ

をゝ春の朝燒けの樂しさよ
雲雀は清らかな空にチルチルチルと
靈妙な歌を流してゐる
一曲唄ひ終ると畠へ下りる
もう夜は過ぎた
驚くべき清新さに輝く春の日は始る

雲雀

雲雀の歌の美しさ
何と云ふ可愛ゆいやさしい樂しい靈妙な施律だらう

チル、チル、チル
清らかな畠の上の靈妙な大空で
囀つてゐる一羽の雲雀
おまへの妙へなる歌が詩にあらはせたらと思ふ
おまへは獨りで樂しく歌つてゐる
いつも元氣に
いつも倦まず
人のことには目もふらず
おまへの命じられたことを
一人樂しんで歌つてゐる
清らかな照り輝く世界の雲雀よ
微妙な潑溂とした歌ひ手よ

御前の胸には聖い火が燃えてゐるやうだ

雲雀

雲雀よ
おまへは小さい巣の中に
ぢつとしてはゐられないで
廣々とした世界へ飛びあがつて歌ふ
俺もさうだ
廣々とした清い空や太陽の輝く方へ
小さい巣から飛ぶ出すのだ

雲雀

靈妙な雲雀の歌よ
チルチルチル！
妙なるメロディーの快さ
百姓は彼を捕らうとはしない

春の日永

長閑な春だ
麥畠の中をゆく
馬と車の可愛ゆさ
小さい前の車の輪と
うしろの大きい車の輪とが
コトコト長閑に廻り
日永の道を
馬も喜んでゆくことよ

自然

自然は靈妙である

この靈妙さを畫にあらはし
詩にあらはすことが出來たら
自分は滿足だ
靈妙極まる大自然の前に
感極つて自分は跪きたくなる者だ
殊にこの頃の春の日
田舍の廣々とした野の空の下を歩いてゐたり
又は月の夜に戸外を歩いて咲きこぼれてゐる花等見てゐると
異樣で靈妙な
造化の神の腕前に隨喜渴仰の涙が流れる
感嘆に盡きる
感極る、一言もない

只自分は愛の潮が塵の身にも高まつて歡喜の中に友の手を握る

月

月は登る
靈妙不可思議の月よ
太陽が沈んで
水を打つたやうに靜かな
野の果てに端麗莊嚴の月は登る
雲雀の歌はやみ
遲く歸る百姓の車の音も絶へ

寂とした萬象を照らして
精靈のやうな月は
豐かに悠々と登る
自分は感極つて禮拜する

生命の花

生命のある花の美しさ

樹木

樹木の美しさ
生命がさかんだから

生命あるもの

生命のあるものは美しい
天が與へた地上の萬物
生命の美しさ

貴いもの

貴いもの
美しいもの
それは生命
それは目に見へない天のものだ
物質以上のもの

樹木

樹木を見よ
彼らはつくられたまゝに伸びる
神のごときもの

生きるよろこび

限り知れない
大きな世界に

生きてゐるよろこび

生命を

生命を讃へよ
實證あるこの感觸

桐の花

草原に

桐の花が濡れてゐた
美しいと思つた
拾つて匂ひを嗅いで歩いた

青葉

青葉を見ると
何か食べたくなる
青葉を見乍ら
羊かんが食ひたい

路を歩き乍ら

路を歩き乍ら
青葉を見てゆくと樂しい
これから樂しい夏になるのだと思つて
何だか嬉しい

青葉の庭

しろし袢纏の植木職人が庭で働いてゐた

土を踏んで青葉の庭に立つ姿が
氣持良ささうで樂しかつた

生命

生命を知るものは
幸福だ
生命を知るものは
神秘を知る
宗教は生命を愛することだ

小さい並木

野中の小さい樹達が
萠え出す若葉で清げな輕裝をしてゐる
麥畠の側に
まるで一群の少女らうた
樂しい小さい並木の清楚な姿

木々

木々は輕裝した
夏らしい

花賣り

町へ行くと
花を賣つてゐる婦人がゐた
髮は束ねて

質素な身なりで
道に新聞紙を敷いて
その上に西洋花をのせてゐた
美しい草花は賣れ行きがよかつた
少女が來たり
會社員らしい若い男が來たり
學生が來て買つて行つた
女の人にはいゝ商賣だと思つた
さう醜くないその婦人に厚意を感じた

樂しく

厚意の感じられる女や男は多い
美しく樂しくくらしてゐる人々
さう富んではゐないらしいが
平和に隣人を愛して
身分相應にくらしてゐる人々
私は彼らに厚意をもつ

子供と犬

田圃の方へゆくと
道の草原に子供が二三人花を摘んでゐた
そのそばに犬が
子供らを守るやうにねそべつてゐた
然うして退屈したやうに
小さい主人達の方を横目で見てゐた
子供達は花を摘んで歸りかけた
犬は猛然と立ち上つて嬉しさうに
彼等の前に立つて麥畠の方へ走つた

まるで彈丸のやうに白い犬は走つた
子供らは手を拍つてはやした
狂ふやうに犬は
麥の中へ突進して姿を隱したり
思はぬところへ姿をあらはしたりして
主人の足ののろさを笑つた
見てゐて氣持がよかつた

子供

子供は子供の

個性に從つて
その好むまゝの生活に生きることを
自分は喜ぶ
自分で發見した
喜びに生きよ
自分は彼の自由を束縛はしない
自分は子供が
語ることをきいてゐると
樂しく成る
彼が樂しんでゐるのを見ると
涙ぐましく成る
彼が何をしやうと

自分は彼の心の喜びを
靜かに聞いて樂しむ
自分は子供に自由を與へる

途上で

麥畠の中に架畫を立てゝ
六號の新らしいカンバスに
美しい色を塗る青年よ
快活な氣分になる
天も地も晴れた

六月の田園の靜かな世界は
今君の制作の慾望を燃やし
君の眼と手は急がしい
リズムのやうに働く
君は古い麥藁帽子をかぶり
ブルースは油で汚れてゐるが
君の姿は初夏の若さのやうだ

初夏

初夏だ

御嬢さん達が
パラソルをさして
田舍へフラ〳〵御出ましだ
何んて目の覺めるやうな
若葉でせう
御嬢さん達よ
セルを召して
新しいパラソルを
い〻恰好におさしになつて
御歩きになる御姿は
實に粹です
パラソルの下で御美しいたらありません

若葉もよろこんでゐます

ゴヤ

ゴヤはえらいと思ひます
人間を手玉にとつてゐるやうに思ひます

女

女に馬鹿にされたくはありません

女を馬鹿にしてやりたい
けれども駄目です
女には敵ひません
女は腹が座つてゐます

若葉

若葉を見ると
戀がしたくなる
粋な若葉がさうさせる

夜の道

友の家を訪ねて
夫婦の歡待に引きとめられ
親切なもてなしと
温い氣持のいゝ接待に醉つて
感謝の心を抱いてかへる
靜かな郊外の夜の道
若葉の中をくゞつて
麥畠の道を通り乍ら
夜の軟かい空氣に魅せられ

いつまでも心が樂しく歩いてゆく

夜かへる友

夜かへる友を
停車場まで送つてゆく
さ霧が立つて
町の燈火が美しく
一日樂しく過したあとで
もう二人は餘り話さないで
默々と停車場へ急ぐけれど

二人は感謝の思ひに満ちてゐる

友の妻

友が妻君をつれて來た
初めて見る友の妻
家の妻子とも馴れ
睦じく話し合つてゐる
自分と友は側で仕事の話をしたり
時々彼女らの話の仲間入りをして
樂しい思ひに皆んな感謝した

金魚

金魚屋の前に
子供が集つて
赤い金魚が樂しさうに泳ぐのを
熱心に見て喜んでゐる
幼い子供の喜びの姿
私も足をとめて一緒に見物した

家の周り

自分の家の周りは
麥畠と若葉の森と
明るい空と小川と草原と
無數の白い靜かな路が
魅力のある明るい野の方へ
少女や若者の足を誘ふ
明るい空に若葉の間を
麥畠の中を縫つて
四つ五つパラソルが

輕く浮んでゆく
鮮やかな色彩が
みづ〳〵しい若葉に調和して
まるで祭りのやうに美しい

樹々よ

樹々よ
お前達はみんな
青々として
踊るやうな恰好をしてゐる

樂しさうに明るい空の下で
虹のやうに輝いたり翻つて
腕を擴げて空を抱いてゐる
踊れ樹木よ
月夜の靑さめた樹木よ

麥よ

麥よ　麥よ
輝いて　輝いて
どんな道も人つ子一人通らない

眞晝の熱さに
肩をすり合せて
浪のやうに太陽の光りに毛をこすれ
麥の毛よ
熱い日に匂へ

雨の夜

雨の夜
流石都會の人通り
濡れた燈火が

濡れた道に映つて
何だか人が想はれる

桐の木

新らしく生へ出す
花や葉の美しさ
花が未だ散り切らないのに
散つたあとからは
青い葉がニョキ〳〵て來て
面白い桐の木の美しさ

桐の木

桐の木よ
花を咲かしたな
しかも匂ひのいゝ紫の花を
愉快な桐の木よ
小さい時から育てられて
いつか賣られるお前には同情する
しかも御前の花盛りは美しい

筍

筍よ
御前の姿は
實に變だな
化物のやうだな
薄暗いところに
ニョキ〳〵と伸びて
青い芽を出したりして

麥

麥は健やかに豐かに村を包んでゆく
日光を戀ふるものゝやうに快活に青々と明るんで
麥は豐かに貧しい村を包んでゆく
麥の中に包まれた百姓家の美しさ
麥の中の樹木の快活な姿
麥はまるで廣い海のやう
麥の中に人や家々や太陽は沒してゆく
オ、一面の麥、太陽の麥
麥の上の空の一片の雲も無い朗らかさ

オヽ麥！　麥！　快活な麥
豐かで新鮮で明るい麥
伸びてゆく麥
風はそこに來て彼らを
輕るやかに搖すつて
彼等を愛撫するやうに見える
風はそこに來て日中樂しく遊ぶやうに見える
麥を見ると俺は明るさを思ひ、快活に成り
豐かな廣々した麥のために、歌ひたくなる
麥よ、伸びよ、健やかに樂しく
暑い日、黃金に熟して苅り倒されるまで
彼等の道中の樂しさよ、またお前の勇敢さよ

まるで人の爲に生えてくれるやうな
お前麥よ
俺は有難く思ふぞ
健やかな麥、快活な麥
霜の置く嚴寒の季節から辛苦し乍ら
しかし快活に人の爲めに盛んに生えてくれる麥よ
俺は喜ぶよ、麥

初夏

戸を出ると

靜かな生垣つゞきの横丁が
どこへでも通じ
眞晝だのに人も通らず
實に閑靜を極めてゐる
カン〳〵輝く澄んだ道と
涼氣の通ふ樹の下の道と
木々が優雅に初夏の
澄み渡る光りを浴びて
清らかな枝々を安らかに自由に生々と明るくのばしてゐる
オヽこの木蔭の光りの明媚さ
この光りの透明さ
澱むものもない深い落着いた

淨らかな感じ
俺は眞晝の沈默が好きだ
至る處に伸び生きてゆく
草木のつぶやきが聞える氣がする
神祕めくものが俺の全身に傳はり
俺を歡びにたつぷり浸してくれる

綠の繁み

綠の繁みが
神祕めく蔭をつくり

一本の小徑は
草にはさまれて
樂しげに靜かに横つてゐる
誰も氣のつかない
この横丁の閑靜さ
俺はこの道を樹木と草とに圍まれて
午後の閑靜さをたのしんで通る

黑い蝶

凉氣の滿ちたうす暗い綠蔭の光りの中を

威嚴と淑やかさと
艶めかしい姿を絹の黑いものづくめで包んだ
豪奢な富んだ貴婦人のやうに
ゆつたりと健康さうに
小さい蝶のやうに狂ひ廻らず
日向の暑さを避けて
華やかな黑い蝶
神祕めく庭園の奥深く逍遙つてゆく

初夏

初夏の豊かさ、快さ
樹木の夢、濃やかに深く
まるで神秘の園の開放されたやう
樹木の黄金時代
至る處變化して
空を優しくする樹木の壯麗さ
洋々たる大氣と樹木の間より
天樂の聞ゆる心地
おゝ雄大の眺めよ

空に燃えてゆく綠の
累々たる盛んな湧出

樹木達

若々しい思ひを包む
雄大な樹木達
まるで實在か幻か疑はれる
神秘な樹木の姿

花が散つて

花が散つて
輕快な若葉と變つた
木々の樂しさ
重荷の花も目出度く咲かして
これで一安心と云つたやうに
奔放に繁つてゆく
その愉快さが木々には溢れてゐる

繁み

だん〳〵繁みが深くなる
綠蔭の色が濃くなつて
健康の思ひが天地に溢れて來る
女も男も健康さうに
生々として歩いてゐる美しさ
樂しい力が湧いて來る
毎日が樂しい
毎日が希望だ
希望の方へ、自分の憧れは向いてゆく

健康な樹木

快活で健康な樹木
どこにあんなに溢れる
生氣を持つてるか
不思議のやうな美しい樹木
花が散つて
青葉に變つた姿の美しさ
その變化の神祕さよ

草

草がやさしく大地に生えてゐる
まるで大地が夢見て
生れたやうな優しい感じだ
大地はいろ〳〵のものをつくる名人
土を輕蔑するな

樹や草

いかに樹木や草が
大地にぴつたり調和してゐるか
ちやんとそこに生れたところに
優しく氣品をもつて生えてゐる
彼らはうゐたへず
天然のまゝに生きてゐる
靜かにやさしく

木々は

木々は皆んな
小さな可愛らしい優雅な
花よりも魅力のある
軟かい小さい若葉を
枝々にくつつけて
全力をあげて靜かに
生々と立つてゐる